

FAIRY TAIL ～異端なる滅竜の力～

コンビニバイター

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

X783年……魔導師ギルド・フェアリーテイルに1人の少年が入り物語は始まる。

目次

第1話…竜殺しの一族	1
第2話…猛獣を捕獲せよ!	9
第3話…弱点	15

第1話…竜殺しの一族

滅竜魔法…それは自らの体を竜の体質へと変化させる太古の魔法の一種、人が竜から授かり竜を滅する為に生まれた唯一の力…だがそれは違った、滅竜魔法が生み出される遥か昔から一子相伝で受け継がれてきた竜を殺す力が存在していた。

「はっ!!ほいつ……ドルア!!!」

「……」

広い草原で黒髪の少年が汗を流し身体を動かす様を老人が眺めている。

「今日の修行はこの位にするかなあ…爺ちゃん!飯を探りに行こうぜ!!」

「……」

「?…おーい爺ちや〜ん!遂にくたばったか〜?おーい!!!」

「勝手に殺すな、バカタレ」

ゆるりと立ち上がった老人が少年を見る。

「良くここまで極めたなシンよ、儂は愚か歴代の誰もその齢で一族の力を扱える様になった者はおらん」

「へえー」

「天才じゃよ…お前は」

嬉しそうな顔で老人は少年に語りかける。

「シンよ…コレを」

「何だこの紙切れ…地図か、それに手紙まで」

「その地図の目印の付いてる街に行け…其処には儂の古い友人がマスターをしている魔導師ギルドがある…名はフェアリーテイル」

「あつそう」

「お前を旅立たせるといふ事はつまり…分かっとなるな」

「ああ…やっぱりもう死んじまうんだな爺ちゃん」

「そういう事じゃ…儂の友に…マカロフによろしく言っといとくれ……」

「わかった、まあ墓はちゃんとしたの作ってやつから心配すんな」

「なら…僕は眠るとしよう…シンよ…お前の…一族の滅竜の力…託したぞ…」

「…爺ちゃん」

その場に倒れた老人を担ぎ歩き出す少年…やがて一面花畑の場所に到着、老人の遺体を埋めた後に数十メートルはあるクリスタルを持ってきた少年は先程の言葉通りに老人の墓を作る。

「そんじゃ行くか…フェアリーテイルって所に」

荷物を持ち少年は走り出した。

くマグノリアく

「漸く着いた、此処がマグノリアって所か？デカイ町だな」

数日間も走り少年シンは目的地であるマグノリアへと到着した。

「この町のどつかにフェアリーテイルってギルドがあるのか、お！町の地図があるな…よし大体わかった取り敢えず迷ったら人に聞きやいいか」

シンは町を見物しながらフェアリーテイルを目指す。

「でけえ家だなくこれがギルドってやつか、話には聞いてたけど実物はすげえな」

お世辞にも綺麗とは言えないがシンの目の前には大きな木造の建物…魔導師ギルド・フェアリーテイルが其処にあった。

「取り敢えずマカロフって人に手紙を渡さねえと…」

押すとギイイという音を鳴らす扉を開きシンは中へと入る。

「お？何だ初めて見るガキだな」

「どうした、迷子か？」

「ここフェアリーテイルっていうギルドだろ？マカロフって人は居るか？」

ギルドのメンバーであろう2人のオジさんに声を掛けられたシンは自分の目的を話す。

「マスターなら…ほれ、あそこのカウンターに座ってるぜ」

煙草を加えたリーゼント頭のオジさんがフェアリーテイルのマスターであるマカロフの場所を指差す。

「そうか、あの爺さんが…サンキューおっさん達」

「お…おっさん」

タン!!

「なー」

「マジか?!」

シンは高々とジャンプし数メートル離れたマカロフの所に降り立った。

「あら、凄いわね」

「ん?なんじゃ」

「よっ!爺さんがマカロフって人か」

「!!…そうじゃが、お主は何者じゃ?儂に何か用か」

カウンターの奥には銀髪の女性ミラジエーンが驚いた表情をし、マカロフはシンの底知れない何かを察し鋭い目付きで凝視する。

「俺はシン…シン・ベルセルクだ!」

「ベルセルクじゃと!!」

シンが自分の名を言うとマカロフは大きな声を出し驚く、その様子を見ていたギルドの人々は世間話や仕事の打ち合わせ、どんちゃん騒ぎ等を止めシンを見つめる。

「お主はゼノンの孫か?!」

「おう!あ、そうだそうだ爺ちゃんから手紙がく…あつた、これ爺さんにつて」

シンが何者か理解したマカロフにシンは祖父からの手紙を渡し、マカロフはそれを読む。

「そうか…奴は死んでもうたか」

手紙を読み終えたマカロフの瞳から一滴の涙が流れる。

「お主は…シンはこれからどうするつもりじゃ?」

「どうするつっうー聞かれても特に何も考えてねえなあ…(殺らねえといけねえヤツらはいるけど、まだ力が足りねえって言われたしな)」

「それならこのギルドに入れ、手紙にも書いとる」

「そうなの?ふーん…ま、いつか!それじゃ世話になるぜ爺さん」

「それが良いじゃろう…ミラちゃんや後はよろしくのお」

「はい、それじゃシンくんよね？こっち来てギルドの紋章押しあげるから」

「わかった」

ミラジエーンの所に行ったシンは左腕にフェアリーテイルの紋章を押しもらう。

「これで貴方も今日から私達の家族の一員よ」

「家族？」

「そうよ、血は繋がってなくてもギルドの皆は家族も当然なの」

「へえ…家族か、良いなそう言うの」

シンは左腕の紋章を見ながらニツと笑う。

「おーい！其処のお前ー！！」

「あーい！」

大声を出しながら桜色の髪の男と青い猫がやって来た。

「俺はナツ！ナツ・ドラグニルだ！」

「オイラはハツピーよろしく」

「おいこらクソ炎、いきなり子供周りで騒ぐな鬱陶しい」

「何だと？やんのかコラ！！」

「こんなバカは相手にしなくて良いぜ、俺はグレイ・フルバスターだ」

「漢！漢！漢！！小さくても漢だあ！！」

「残念だ、せめて女の子に来てほしいんだがね」

「ちよつとロキ、子供に対してそんな事言っちゃダメだよ」

「優しいレビイも可愛いぜ！」

「流石俺のレビイ！」

「ドロイお前いま何て言った！」

「文句あんなのかジェット！！」

「後10年したらお姉さんが飲み連れてってやるよー！」

「カナ、子供に酒の話はやめなさい」

「…ビスカの言う通りだよ…」

「アルザック、絵を描いてる時は動かないで」

ナツを筆頭にシンの周りを多くの人が取り囲み、また騒がしくなる。

「お前たち静かにしろ！まだギルドに入ったばかりで右も左も分からん子供に大勢で押しかけるな!!」

緋色の髪の女性エルザ・スカーレットが大声でシンを取り囲んでいるメンバーを怒鳴ると先程までの騒ぎが嘘の様な静寂が訪れる。

「騒がしくしてすまないな、皆んな君の事を歓迎したいんだ悪く思わないでくれ」

「別にいいよ、気にしなてないから」

「そうか：私はエルザ・スカーレット、ようこそフェアリーテイルへ」
「俺はシン・ベルセルクよろしくな」

シンとエルザは握手をし、その後エルザの指揮の元シンへの質問コーナーが執り行われた。

「では質問のある者は挙手しろ」

「改めて名前とそれから年齢も教えて」

「名前はシン・ベルセルク歳は10だ」

「何処から来たんだ？」

「俺は爺ちゃんと世界中を旅してたから何処から来たかとかは分からなえや、爺ちゃんが死ぬ前に友達のマカロフって人のギルドに行けって言ったから此処に来たんだ」

シンの祖父の死の事を聞きギルドは少し重い空気になるがシンがその事に関しては気にしなくてもいいと言い質問は続いた。

「どんな魔法使うんだ？」

「俺は剣とか格闘系のを使うぜ」

「剣っていうとエルザみたいなのか」

その後、好きな食べ物やら世界中を旅して1番面白い国は等、色々な質問がされる。

「エルザー！俺にも質問させろー!!」

「わかった：じゃあナツ質問するといい」

口から火を吐きナツが吠えてエルザがため息混じりに質問を許す。

「俺と勝負しようぜ！」

「おいナツ、子供を相手に勝負しようぜとか何言ってるんだ」

「怪我でもさせたらどうするんだ！」

ナツのその言葉にギルドメンバー全員が呆れた顔をして止める様に言うが…

「弱い奴と勝負しても詰まらないから嫌だ」

シンの予想外の言葉に全員が驚愕の表情をする中、ナツの身体から炎が出る。

「お前…今なんつった？」

「弱い奴と勝負して詰まらないって言ったんだよ」

「表に出やがれ!!クソガキー!!!」

売り言葉に買い言葉…シンとナツはギルドの外へと出ていく、その時に怒り狂ってるナツがギルドの扉を蹴り壊す。

「エルザ今すぐやめさせてよ」

「ああなつてしまつては仕方あるまい…それに私もシンの实力を知りたい」

「知りたいってあんな子供の力なんてたかが知れてるだろ!」

(確かにそうだが…手を握った瞬間に感じた魔力とは違う途方も無い何か…シンは普通の子供ではあるまい)

勝負を見守るギルドの面々の中にはエルザやマカロフに止める様に掛け合う者がいるが断られる。

「おいシンとか言つたな怪我しても泣くんじゃねえぞ」

「そつちこそ痛い目にあつても文句言うなよ…確かナツだったよな」

「歳上には敬語使いやがれ!!」

ダツ!

ナツとシンが少し距離を取つて向かい合っていたが痺れを切らしたナツがシンに向かっていく。

ブン!ブン!ブン!

スカ、スカ、スカ

「ちよろちよろ避けやがつて!」

「動きが大雑把で攻撃が単調過ぎなんだよ、ナツは」

「んだとコラー!!」

ブン!!!

ペシッ

「よ!」

ドガ!

「痛っ?!」

シンはナツの連打をいとも簡単に交わし続け、強打を片手で払い除けて蹴りを入れ吹き飛ばす。

「ガキなのに中々やるじゃねえか、シン」

「ナツは思った通りの強さだな」

「……だったらコレならどうだ!火竜の!!」

「馬鹿、ナツ!」

「何マジになってんだ!」

互いに少し笑みを浮かべ会話するが相変わらずのシンの上から視線な言葉にカチンと来たナツは大きく息を吸い込む、すると周りのメンバーが慌てる。

「咆哮!!」

ゴオオオオオオ!!!

「やっちゃまった…」

「誰か早く火を消せ!」

ナツの口から吐き出された炎はシンを飲み込む…がブオーーーーーン!!

「な、ナツの炎が?!」

「空に昇ってる…」

炎は螺旋を描きながら空へと上昇し消え去る。

ゾワツ!

「何だ…あの剣?!」

炎が消え去ると同時に得体の知れない圧力をナツは感じ、其処には自身の倍はある灼熱の炎の様な色をした大剣を持つシンの姿があった。

「滅竜剣技…天魔・昇竜閃」

「な?!滅竜…剣技!?何だそりゃ」

「そんなの聞いた事もねえぞ」

シンの言った言葉にギルドメンバーが驚く。

「スゲエな今の普通の炎じゃねえんだろ？」

「シンさっきのは何だ！滅竜剣技って何なんだ!？」

「後で教えてやるよ…取り敢えずケリつけるか」

大剣を消してシンは拳に力を入れる。

「遙か太古の昔から竜の血肉と魂で生み出されし剣を振るい、更に剣から溢れる力を己の身体に巡らせて放つ剣技と体術を得意とする者」

「マスターはご存知なのですか？シンの力を」

「エルザ…ああよく知つとる、竜殺しの一族ベルセルクが一子相伝で継承してきた力その名は…滅竜剣士^{ドラゴンブレイカー}」

「滅竜体術・竜骨!!」

ボゴオ!!

「ゴペア?!」

シンはナツの懐に瞬時に潜り込み脇腹に一撃を入れ、ナツを吹っ飛ばす。

バコオーン!

ガシャーン!

ガラガラガラ!バキバキ!!

そして吹っ飛ばされたナツはギルドの壁に激突し穴を開け、更にギルドの中の机や椅子等の備品を巻き込み気を失う。

『……………』

その惨状に勝負を見守っていたギルドの全員がシンに視線を送る。
「え〜つと…その…ぶ、ゴメンなさい」

シン・ベルセルクがフェアリーテイル加入日にやらかした出来事はギルドの外壁及び備品の破壊、ナツ・ドラグニル軽傷というなんとも傍迷惑な事であった。

第2話…猛獣を捕獲せよ!

シンがフェアリーテイルに入ってから約二か月が経とうとしていた。

「爺ちゃんただいま〜」

「おおシン今回も早かったのお、仕事は終わったか?」

「まあなく…ミラ〜何か適当に食いもん持ってきてくれ〜」

シンは討伐系のクエストを中心に二か月で約300万Jを稼いでいた。

「おーシンじゃねえか、帰ってきてたんだな!なあなあまた一緒に仕事行かねえか?」

「ゼツテー行かねえ!!!」

何だかんだで仲良くなったナツがシンに仕事の誘いをするが拒否される。

「何でだよ、つれねえな〜」

「何でだよ?!ナツでめえソレ本気で言ってるのか!お前と仕事行くと報酬金額減るんだよ!毎度毎度バカみたいに物壊しやがって!!」

「んだと!お前だって山とかブツタ斬ったりしてんだろ!!」

「俺はお前みたいに毎回じゃねえ!偶にだ!偶に!!」

「お前らエエ加減にせんか!!どっちも同じじゃ!いつも評議会から始末書を渡される儂の身にもならんか!!」

シンとナツが目くそ鼻くその言い合いをしてるとマカロフがプルプル震えた後に巨大化し2人に説教をする。

「…ナツの所為で怒られたじゃん」

「シンの所為だろ」

「黙らんか!全くお前達2人は…:はあミラちゃん胃薬くれんか?」

全く反省していない2人に呆れるマカロフはミラジェーンに甘える。

「仕方ねえ一緒に仕事行けないんなら…:俺と勝負しようぜ」

「またかよ、先週もボコボコにしてやった所だろうが」

「へ!そんな昔の事は忘れたな、今の俺はあの時とは違うぞ!!」

「その台詞先週も聞いたぞ」

シンとナツの勝負はこの二か月で10回程行われてるがシンの全勝となっている。

「お？何だ何だ、まくたナツとシンの喧嘩かよ」

「よし！じゃあどっちが勝つか賭けようぜ！俺はシンが勝つのに1万J」

「アタシはシンが勝つに今晚の酒代全部」

「俺もシンが勝つに10万Jだ」

「何で誰も俺に賭けてねえんだよ！」

「あい、これまでの結果からしたら妥当だと思うよ」

周りのメンバーも囁し立て勝負しなければならぬ雰囲気になる。

「全員他人事だと思って好き勝手しやがって…ったく」

「?!隙あり！火竜の鉄け…ZZZZZZZZZZ!!」

ズザザー…！

「うっ！コイツは?!ZZZ」

「眠っ!!ZZZ」

ナツは呆れた顔でうつ伏せるシンに攻撃を仕掛け様とした途端に床に倒れ爆睡する、そしてマカロフとシン以外のギルドメンバー全員がバタバタと倒れる。

「…爺ちゃん皆さんどうして寝てんだ」

「シンは耐えるか…ほれ奴じゃ」

「？」

周りの気配を警戒しつつシンはこの事態の質問をした、するとマカロフがギルドの二階へと続くの階段を指差すとギイギイとゆっくり音を鳴らし杖を持ち顔をバンダナ等で覆い隠した人物…フェアリーテイルS級魔導師の1人ミストガンが降りてくる。

「居ったのか…ミストガン」

ピタッ

「……お前は」

「よっ！初めて会うな、俺はシン！二か月くれえ前にフェアリーテイルに入ったんだ、よろしくな」

「……ミストガンだ」

マカロフの所にやってきたミストガンは自身の睡眠魔法をもつてもしていないシンの姿を見て暫く静止するがシンから挨拶されると、聞き取り辛いが自分の名をシンに名乗る。

「……行ってくる」

「お？S級のクエストじゃん！」

ミストガンがマカロフに提示したクエスト用紙には大きくSの文字が記載されていた、S級クエストとは通常のクエストよりも高難易度のクエストで中には生きて帰ってくる事が出来ないかも知れないものも含まれており受注出来るのはマカロフに実力を認められた者だけである。

「なあミストガン一緒に行ってもいいか？」

「…すまない」

「そうかく残念だ」

「ミストガン、行く前に眠りの魔法を解いとくれ」

「ああ…」

「ちよつと待った、ミストガン!!」

S級クエストに興味津々のシンは同行出来ないかミストガンに聞くが断られてしまう、そして仕事に出発しようとしたミストガンを急に呼び止めてからクエストボードから依頼書を1枚千切ってマカロフに提示する。

「ナツが起きたらまた勝負しろ〜とか言われるから俺も仕事行くわ」

「疲れておらんのか？」

「大丈夫、大丈夫！ミストガン俺が出てから魔法消してくれよな」

「……」

コクリ

「よつしや！今夜は焼肉食べ放題だ!!」

ミストガンはシンの頼みを承諾したのか無言で頷く、そしてシンは報酬金3万J+焼肉食べ放題のクエスト「マグノリア近隣の草原を縄張りとしている暴れ牛鳥20頭の捕獲」の仕事へと出発した。

「…面白い子ですねマスター」

「まあ…またギルドが騒がしくなってもうたわ」

ニッ

「…では自分も……伍……四……参……式……壹……」

ミストガンはカウントダウンをしながらギルドを後にした、その後寝ていたギルドの皆はまたミストガンの仕業かとざわつきながら悔しがる。

「おいシンが居ねえぞ、何処に行きやがったんだ！勝負しやがれー！」

「ナツ、静かにせんか」

ゴツン！

「痛で!!」

「シンなら仕事に行ったぞ…主らが寝ておる間にな」

「マジかよー!」

「って事はシンの奴ミストガンの眠りの魔法に耐えやがったのか?!」

「スゲー!あのエルザですら耐えられねえのに!」

シンが居ない事に気付いたナツは大声を出しギルドを見回していると魔法で腕を伸ばしたマカロフに拳骨された、そしてマカロフの口から全員がミストガンの魔法で寝てる時に仕事に行った事を教えると全員が一斉に驚いたのだった。

くマグノリア近隣の草原地帯く

「おおたくさん居んなく」

シンは依頼主の店に行ってから巨大な荷車を引いて草原の小高い丘の上に到着して目標の暴れ牛鳥の群れを見渡す。

「それじゃ始めつか……ほっ!!」

「?!…グルルル!!」

「ハハッ!犬みてえな鳴き声してやがんな」

丘の上から飛び降りたシンに暴れ牛鳥達が気が付き威嚇する。

「グルラアアア!」

「滅竜刀ヤマツカミ…」

ガン!

1頭の暴れ牛鳥が突進してくるとシンは長方形型の木刀を出現さ

せて暴れ牛鳥に一撃を入れて荷台に吹き飛ばす。

「グ…グエ…グエ」

ビリビリ

「よし後19…きつさと終わらせるか」

荷台へと飛ばされた暴れ牛鳥は全身が痺れて全く身動きが取れない状態になっていた、暴れ牛鳥はその名の通りかなり凶暴な動物で自身の縄張りに入ってきた侵入者には必ず攻撃を仕掛ける…がそれが仇となり暴れ牛鳥達は瞬く間にシンに捕獲されて行く。

「よし後1頭…って逃げやがったか」

シンの余りの強さに残り50頭以上はいた暴れ牛鳥達は逃げ出してしまった。

「グガァー!!!」

「ん？」

シンが頭をポリポリと搔いていると暴れ牛鳥の鳴き声が聞こえてきたが先程までとは比べ物にならない怒号が響き渡る。

「何だ？お前が牛共のボスか？」

其処には通常の暴れ牛鳥の3倍の大きさはある群れのボスが鼻息を荒だててシンを見ていた。

ニヤツ

「……来いよ」

「ガァー…!!」

ドドドドド！

シンが左手の人差し指をクイッククイッと曲げて挑発すると暴れ牛鳥はシンに向かって猛スピードで突進してくる。

「滅竜剣技・竜翔閃！」

ガン！

「グァ?!」

「竜槌閃！」

ドガゴーン！

低い姿勢から飛び上がる最中に暴れ牛鳥の顎に一撃を入れ、その後上空から落ちる勢いを利用し眉間にも一撃入れて暴れ牛鳥のボスを

仕留める。

「よし仕事終了！さあ〜て肉だ肉〜」

シンはルンルン気分で依頼主の店に戻る、その途中20頭もの暴れ牛鳥を積んでる荷台を少年が楽々と運んでいた姿に街の人々が驚いたのは言うまでもない事である。

第3話：弱点

「火竜の鉄拳!!」

ドゴオン!

「何だ、今の爆発は?!」

「お、親分!魔導師の奴らが乗り込んで来やがった!」

「フェアリーテイルだ!近くの村で悪さばかりしてるチンピラ集団の巢は此処だな!」

「誰がチンピラだ、俺たちは山賊だ!」

「似た様なもんだろ!!」

シンとナツは山賊退治のクエストに来ていて、そのアジトの扉をナツが破壊して真正面から突入した。

「燃え尽きろー!」

「ぎゃー!!」

「ガキだ!ガキの方を狙え!!」

「滅竜体術・鋼竜寸鉄!」

ギイーン!

「うわあー?!鉄の斧を素手で斬りやがったー!!」

「に、逃げるコイツら化け物だ!!」

「逃すわけねえだろうがあ滅竜体術・竜の息吹!!」

「こいつでも喰らえ火竜の咆哮!!」

山賊達もシンとナツを迎え撃つが力の差は歴然で逃走しようとするもシンが地面を砕き立つことさえ出来ない状態になり、其処にナツの炎が放たれて構成員約20人の山賊は黒焦げの状態でお縄となった。

く近くの村へ

「族を捉えていただきありがとうございます」

「この位どうって事ねえよ、なあシン!」

「まあな」

「ナツとシンが相手だなんてあの山賊達も運がなかったね」

依頼主の村長から御礼をされたナツとシンとハッピーは報酬金を

受け取って村を後にしようとしたが…

ゴゴゴゴゴ!!

「何じゃ?!この揺れは!」

「そ、村長様見てください山が!」

突然大きな揺れと共に先程まで山賊達のアジトとなっていた山が崩れていく。

「またやっちゃった!!」

「あいさー!」

〜フエアリーテイル〜

「ハハハハ!!お前らまたやらかしたのか!」

「二人とも少しは学習しろよ」

ギルドに戻ったシン達の仕事の話を聞いたメンバーは大笑いしていた、幸いな事に崩れた山は無くても問題なかったみたいで報酬金は減らずに済んでいる。

「山が無くなったのナツのブレスの所為だからな」

「シンが地面を割った所為だろ!」

「オイラは両方とも悪いと思うよ?」

毎度お馴染みの言い合いにまたギルドには笑いが巻き起こる。

「シン戻ってきたか!!」

「何だエルザ、俺に何か用か?」

「実はちよっと手伝ってほしい仕事があつてな」

「エルザが他の奴に仕事の助けを求めただと?!」

「いったいどんなクエストなんだよ!」

エルザがシンを仕事に誘うと周りのメンバーが慌てふためく…エルザはS級魔導師なので基本的にはどんな仕事もたった一人でこなしてきた、だからこそ他の者達は驚いている。

「手伝うのは構わねえけど何の仕事だ?」

「移動しながら話そう、早くしないと列車が出てしまう」

「列車…うぷっ」

「ナツ気分が悪そうだな?私に任せろ」

ドーン!

「ガハッ?!」

「酷でえ…」

「では行くぞシン!」

気分が悪くなったナツの腹を殴り気絶させたエルザにドン引きするシンであった。

く列車内く

ギルドを後にしたエルザとシンは駅から列車に乗り込んで座席に座る。

「さてと…仕事の話だが実は今から向かう街で人攫いが頻繁に起きる」

「只の人攫い位ならエルザ1人で十分だろ?」

「只の人攫いではないからお前に来てもらっている」

「そりやそうか…で、どんな連中なんだ?」

「それが…姿を見た者は居ないらしい」

「どういう事だよ?」

「順を追って説明する…数日前から朝になると子供が行方不明になる事件が起こり街の人達はその原因を調べようと夜中の警備を強化したが誰1人として朝まで起き続けて警備出来た者は居なかった、恐らく睡眠系の魔法を使われたんだろう…がそれだけなら対策さえすれば普通の魔導師でも何とかなるのだが12歳以上の人を通さない術式が街の中だけでなく街の外の至る所に設置してあって子供達は自らの足で街から消えてしまいうらしいんだ」

「成る程、眠りの魔法で街の大人を術式で魔導師の動きを封じてから催眠術かなんかで自分の顔をバラさずに子供を攫う…って事か」

「ああ…レビィに術式を解除してもらう方法も考えたが数が余りにも多過ぎる…犯人の顔が分からない以上は解除してもまた術式を設置されるかも知れん」

「つまり俺に催眠術に掛かったフリをして人攫い共のアジトに潜入してほしいって事か」

「話が早くて助かる…あのミストガンの眠りの魔法にも耐えたお前ならと思つてな、普通の子供には危険な役目だがお前なら問題無いだろ

う」

「そういう事なら任せとけ」

「感謝する、幼い子供を攫うなど……絶対に許さん」

エルザはシンに仕事の内容と作戦を伝えた後に窓の外を眺めるが、その表情は普通の人が見たら間違いなく脅える様な顔をしていた。

数時間後、列車は目的の街へと到着したのでシンとエルザは列車から降り街を見渡す。

「大きな街だな……へえ他のギルドの魔導師にルーンナイトまで」

「被害は昨晩で21人に達した様だ……最初は1人、次は2人……そして3人4人と日をおうごとに1人ずつ行方不明になる子供が増えていく」

「そうなると只の人攫いとは考えにくいな……やり方がまどろっこしすぎる、一気に攫って街を転々とした方が捕まる危険は低く済むだろう？」

「ああ……だが何にしろ今晚7人の子供が居なくなる可能性が高い……頼むぞシン」

「ま、何にしても夜になるまで飯食いなから作戦でも立てるか」

シンとエルザは宿を取り、その後食事を済ませ街中を散策しながら魔法屋で作戦に必要な魔法薬などを購入した。

数時間後、夜

「さて……そろそろか？」

「ああ………換装！・幻夢の鎧」

シンとエルザはこの街で一番高い建物で街に張り巡らされた術式の発動と睡眠魔法が発動するのを待っていると街にある時計塔の針が0時を刺そうとした時エルザが鎧を変更する……エルザの魔法はザ・ナイトと呼ばれ様々な武器と鎧を換装して戦うもので今は幻惑や睡眠・催眠魔法を防ぐ鎧へと換装する。

ゴォーン！ゴォーン！

「始まったか」

鐘の音と共に街の至る所で無数の術式が発動し、巡回していたルーンナイトや魔導師達は閉じ込められてしまい術式の解除に躍起に

なっている。

「エルザ、彼処に子供がいる」

「よし行くぞ」

フラフラと裸足で街を徘徊する子供を見つけたシンとエルザは建物を飛び移りながらその子供の所へ向かう。

「ではシン作戦通りに」

「分かった」

シンとエルザの作戦とは、シンが催眠術に掛かった子供の後をつけて人攫いのアジトを見つけるといふものだが毎晩決まった人数を誘拐しているので人数が増えると怪しまれる、其処で最初に1人の子供の後を追う他の子供を見つけたらその子の催眠術を解除し他の子供達と共に人攫いのアジトまでついて行き、アジトに到着したらバレない様にロケット花火でエルザに場所を伝え人攫い共を叩くというものである、因みに催眠術を解除した子供はエルザが保護する事になっている。

「その前にシン…コレに着替えるんだ」

「何だよそれ…」

「見ての通りパジャマだ！私が選んだ!!」

目を輝かせてエルザがシンに子供用のパジャマを見せる。

「嫌だ…」

「何を言っている、1人だけそんな服装の子供がいたらへんだろ！他の子供達は皆パジャマを着ているんだから早く着ろ」

「…」

シンは渋々パジャマに着替える。

「似合ってるではないか、やはり私の目に狂いは無かった」

「エルザ…お前なんか楽しんでねえか？」

「そんな事はない、さあ早く行け見失ってしまふぞ」

シンはエルザと別れて子供を追いかける。

やがて他にも催眠術をかけられた子供を見つけたシンは催眠術を解除する魔法薬を子供に飲ませてからロケット花火を上げ更に子供

達の後を追う。

(街の教会?なんでこんな所に……ん?誰か居やがる)

「はい皆よく来たわねくさあ中にお入りく」

(そうか、街の外にも術式を張り巡らせたのはアジトを街の外だと思わせる為か)

シンと子供達が街にたつた1つしかない教会に行き着くと中から二十代くらいのシスターが出て来て子供達の中に入れる。

「よしよし今晚も無事収穫出来たな…全くルーンナイトや魔導師達も大した事ねえーなあ!!アヒヤヒヤ!」

「神父様バカ笑いでないで早く地下に…」

(へえ…神様に仕える神父とシスターが人攫いか……今すぐボコボコにしてえ所だが他の子供達の居場所も突き止めねえと)

神父とシスターと共に螺旋状の階段を降り教会の地下深くへと連れていかれる。

「ボス、新しいガキ共が来ましたぜ」

「よしお前ら儀式の準備だ!」

地下には人攫いの親玉と数人の子分達、そして結晶の中に封印されている魔導書があった。

(成る程…この魔導書を手に入れるのが人攫い共の目的か)

シンと子供達は結晶を囲う様に立たされ、先程の神父が杖を持ち呪文を唱えていく。

(コイツ…^{デイスペラー}解除魔導師か)

呪文を唱えてる最中ずっと結晶は光を放ち続けて、神父が呪文の詠唱を終えると結晶の光は消える。

「ボス後3日続ければこの封印も解けますよ」

「そうかそうか…それにしても面倒な封印だな、毎日毎日ガキを増やしながらいやねえと取り出せねえとは」

「そーいやボス攫ってきたガキ共はどうするんですか?」

「用が済んだら人売り家業の奴らに売り渡す事になってる…高値で売れるぜガハハハ!」

「流石ボス、無駄のねえやり方でさあ」

「そうだろそうだろ！もつと褒める！」

その後シンと子供達は牢屋に入れられ、人攫い共は宴をする為に居なくなる。

「さてと…どうやってエルザに知らせるかな」

地下にいる為合図を送れてないシンはエルザとの連絡手段を考える。

「くっそ〜ウォーレンを連れてくるべきだったな…仕方ねえ監視もいねえしバレねえ様に脱出してからエルザと戻ってくるか」

泣き叫ばれない為か幸いな事に子供の催眠術は解けてなかった為シンは1人で脱出する事にした。

「そろそろか？…滅竜剣ジエン・モーラン」

キーン

数時間後、馬鹿騒ぎしていた人攫い達の声が聞こえなくなったのでシンは剣を手に牢屋の斬り外へ向かう。

「この変でいいか…もう日も出ちまう早くしねえと」

外へと脱出したシンはパジャマの裏に貼り付けておいたロケット花火を取り出し火の大剣で点火すると花火は空へと打ち上がった。

街中の術式が解除された後に保護した子供をルーンナイトに預けたエルザはシンからの合図を待っていた。

「シンからの合図…換装！飛翔の鎧」

エルザはスピードを強化する飛翔の鎧を身に纏いシン在所へと向かう。

「早かったなエルザ」

「シン、子供達は何処だ？」

「この教会の地下だ、催眠術がまだ解けてなかったから連れ出すのはやめといた」

「良い判断だ…では先ずは子供達在所へ向かうぞ」

人攫い達にバレない様に教会に侵入したシンとエルザは地下に向かう。

「26…27…よし数も合ってる全員無事でよかった」

地下に着いた2人は子供の人数と顔を確認する、先日までに連れ去られた子供達は街の新聞などで顔が掲載されていたのでエルザが確認し、今回連れ去られた子供はシンが確認をした。

「…エルザ」

「ああ…どうやら此方に来ているな」

地下に向かってくる気配に気付いた2人は静かに身構える。

「シンお前は此処で子供達を見ていてくれ…：奴等は私が始末する」

「うちの女王は怖えなあ」

エルザが剣を手に牢屋から出て行った直後無数の悲鳴が地下に響き渡る…その後、ルーンナイトに人攫い達を引き渡し封印されていた魔導書も回収し子供達も全員無事に親の元へと帰された。

「フエアリーテイル」

「エルザとシンが帰ってきたぞ!」

エルザとシンは昼過ぎに漸くギルドへと帰ってきた。

「エルザ帰ってきたか」

「マスター私に何か御用で?」

「ちと評議会に始末書を出しに行くので着いてきてもらおうと思っ
ての」

「分かりました、直ぐに出発しましょう」

エルザはマカロフと共に評議会へと出向く。

「流石に眠いな…ふあ」

「何だよシンだらしねえなあ」

「うるせえナツ…寝てねえんだから仕方ねえだろ、この水貰うぜ」

ゴクゴク

連日の仕事で少し眠そうにしてるシンは椅子に座り机の上に置いてあった飲み物を飲む。

「折角また勝負しようと思っただのに今日はやめとくか」

「どうせまた負けるんだからやめとけナツ」

「なんだと?シンの前にお前からぶっ飛ばしてやろうか変態パンツ野郎」

「望む所だクソ炎!」

「ねえアンタ達、此処に合った私の酒知らないかい？」

火花を散らすナツとグレイを他所にトイレから戻ってきたカナがキョロキョロと周りを見回す。

「……ヒツク…ウイ〜」

「あ?!シンそれ私の酒!」

「おいおいカナ、ガキに酒を飲ませたらダメだろ〜」

「俺あくガキじゃねえぞ〜このヤロおがあく!!」

ドゴオン!

「グハア!!」

顔を真つ赤にしたシンがワカバに飛び蹴りを食らわす。

「お、おいシンの奴まさか酔ってんのか?!」

「嘘?!コップに入ってた酒はほんの少しだけだったわよ」

「ウイ〜、どいつもこいつもガキガキって馬鹿にしゃがって〜…ヒツク…」

完全に酔っ払ってあるシンは見境なく周りの物を素手で壊し暴れまわる。

「おい!誰かシンを止めろ!!」

「任せろ!火竜の翼げ「うるせえー!!」ゴハッ!!」

「ナツがやられた!」

「アイスメイク…牢獄^{プリズン}!」

「しよ〜りゆ〜けええん!!!」

バゴオン!

「グハア!」

「漢なら子供の1人くらい片手であやしてみせ「誰が乳クセエガキだあー!!」グオオオ?!」

「グレイとエルフマンまでやられた!ヤベエぞ全員で取り押さえろ!!」

ギルド全員で取り押さえようとしたがシンの強さは凄まじく瞬く間に全員ボコボコにされてしまい、暴れ疲れたシンはその場で眠ってしまった。

それから1つの絶対に破ってはいけないルールがフェアリーテイ

ルで決められた、それは「如何なる理由があってもシン・ベルセルクに酒を飲ませてはいけない」というものだった、評議会から帰ってきたマカロフの話によるとシンの祖父も酒をほんの少し飲んだだけで大暴れした事があるらしく滅竜剣士は酒に酷く弱く、ある意味ではそれが唯一の弱点らしい。